

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02460

研究課題名(和文)十九世紀の絵入本における画文一体構成に着目した書物(メディア)史研究

研究課題名(英文) A Book (Media) Historical Approach to the Integration of Text and Image in Nineteenth-Century Illustrated Books

研究代表者

高木 元 (TAKAGI, Gen)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：00226747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：浮世絵に付された戯作者達が執筆した填詞(解説文)は、文学史からは非文学的なテキストとして無視され、また美術史の側も絵画にしか関心を寄せてこなかった。地本問屋が出版していた浮世絵は、草双紙と同様に戯作者の画稿に基づき浮世絵師が描いたものであり、画と文とが一体化したメディアとして捉え直すことにより、19世紀における大衆メディアの特徴である絵入本の史的意義を再検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我国における近世の印刷物は、西欧の活版印刷文化とは異なり、製版本(木板)による出板が普及したために、絵画と文字とが一体化したテキストとして生産され享受されるようになった。とりわけ19世紀になると出板物の商品価値が増大し、造本にも彩色や意匠が凝らされ、口絵や挿絵なども作者が画稿を描き、画と文とが不可分のメディアとして書物や浮世絵が作られ、享受されるようになった。にも関わらず、填詞入りの浮世絵は、絵だけが重んじられ、画文一体化したメディアとしての研究がなされてこなかった。これらを草双紙と同列に扱い、19世紀文学史のなかに正しく位置付ける必要がある。

研究成果の概要(英文)：The texts written by novelists to accompany ukiyo-e have been ignored by literary history as non-literary and art history has heretofore only paid attention to the images. However, ukiyo-e that were published by book publishers were, like illustrated fiction, designed by printmakers based on sketches done by novelists; this project reexamined the historical implications of illustrated books which constitute one of the from the most important elements of nineteenth-century popular media by treating them as a form of media that integrated both text and image.

研究分野：日本19世紀文学

キーワード：絵入本 浮世絵 草双紙 填詞 19世紀文学史 戯作者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

近世小説における挿絵の問題に関しては、以前から注目され研究が蓄積されてきた。そこで基調となっていたのは「挿絵は本文に付随したものである」との認識であった。

しかし、近世小説史上で最も格調が高かった〈江戸読本〉では、標題に「絵入」「繡像」などと標榜するようになる。見るための〈絵本〉に対して読むための本といわれた〈読本〉にとっても、魅力的な口絵挿絵の持つ意味は決して小さくなかったのである。

一方、草双紙においては絵が中心で、文は付随するものと位置付けられていた。草双紙は全丁に絵があり、その余白に、ぎっしりと平仮名で本文が書き込まれているので、一冊全体で見ても絵の占める位置が大きかったからである。

ところが、文学研究では文章を、美術研究では絵画のみを特権化して対象化することが多く、19世紀文学の特徴である絵入本や浮世絵における文字と絵との有機的な関係については比較的無関心であった。

2. 研究の目的

18世紀末から次第に画賛の伝統に倣った画に添えられた賛としての和歌や発句、漢詩などが浮世絵にも入れられるようになるが、此等については類題和歌集などを用いて画に即した歌が選ばれたとされる。さらに、狂歌の流行に相俟って狂歌絵本の一葉が独立した如き摺物や大小暦が出されるようになり、此等の公刊出来ない私的で贅を尽した交換用の摺物が多色刷りの浮世絵（錦絵）を将来することになる。

19世紀になると錦絵に文字が書き込まれることが多くなる。最初は、画題名や、描かれた役者遊女などの名前を記した短いキャプションであった。次第に書き込まれた文章が長文化して、歌舞伎狂言の外題や上演時に演奏された浄瑠璃の章詞・台詞などが引用抄録されるようになる。役者などの歿後に出された死絵でも、最初は辞世のみであったものが、次第に略伝などが書き込まれるようになり、遂には画文が渾然一体化したものが出されるようになる。

興味深いことに、草双紙と浮世絵とは共に江戸の地本問屋が刊行して売り弘めていたものである。双方ともに絵を描いていたのは浮世絵師であり、草双紙は当然のこと、浮世絵に入れられた文章（填詞）を記したのも戯作者であった。つまり、草双紙と浮世絵とは、同じ環境の下で作成された19世紀の絵入メディアとして存在したのである。

つまり、草双紙と同時期に同じ担い手たちに拠って出された浮世絵（特に填詞入り）を調査することにより、従来、等閑に付されてきた画中の填詞とその担い手の様相を明らかにできる。そのことは、19世紀の絵入本の実体を記述するためには必要不可欠な基礎研究のはずである。

今回の研究で得られた情報に拠り、草双紙との関係や、引札・報条など一枚摺との関係、さらには近代の所謂錦絵新聞をも視野に入れて、19世紀の絵入メディアにおける画と文の一体化の様相を明らかにしたい。

3. 研究の方法

具体的には填詞入りの浮世絵を片端から調査することに尽きる。だがしかし、現在公開されている浮世絵のデータベースには、役者似顔の考証や、描かれた場面に基づいた歌舞伎上演に関する考証がなされていることは多いのであるが、浮世絵自体に記載されている填詞者や筆耕などについては記述されていないことが多いのである。これは、歌舞伎研究の資料として浮世絵が使用されてきた伝統が

存するためであり、そのこと自体は有用なのであるが、浮世絵の書誌としては甚だ不充分であるとし
か言いようがない。

したがって、既存のデータベースを使った填詞入り浮世絵の検索には期待が持てない。そこで、一
先ずは浮世絵画集シリーズ（『浮世絵大観』『浮世絵聚花』など）を使用して填詞入り浮世絵を探す。特に
複数枚の浮世絵がシリーズ化された「揃物」と呼ばれるセットに填詞が入れていることが多い。
特に内外の複数の機関に分散して所蔵されている絵を集めた画集は有用であった。また、比較的頻繁
に各地で開催されてきた浮世絵展の図録も見逃せない。中には、填詞をすべて翻刻してあるものもあ
り、編者の見識の高さを感じるとともに、今回の調査にはすこぶる便宜であった。

一方、近年はインターネット上で浮世絵の画像を公開している内外の機関も多く、重宝ではあつ
た。しかし、前述の通り填詞者（戯作者）名からの検索は出来ないことが多く、逐一実見して確認し
ていくしかない。また、海外の古美術商のサイトに、売れるまでの間ではあるが画像が公開されてい
ることもあり、これらはダウンロードして保存しておいた。

ただ、図録に掲載されている写真やインターネット上の画像は、小さくて読めない場合や解像度自
体が低くて不鮮明な場合もあり、その際は所蔵機関へ直接確認に行く必要があった。

4. 研究成果

今回の研究を通じて明らかになったことを簡潔に概括すれば、浮世絵に入れられた填詞の有無（長
短）は、浮世絵の芸術性とは無関係であり、浮世絵というメディアの経済的な背景に深く関わる問題
であったということである。

かつての、美術史の大家が「画面に文章を入れることは、絵を絵だけで鑑賞の対象とするに耐えら
れないことを意味し、絵の貧困を示す物と考えられる」と述べたことがあるが、これは時代背景を無
視した単なる芸術至上主義的な主観の表明に過ぎず、何よりも普遍的な実証性が欠如している。なぜ
なら、填詞が増えてくるとは、錦絵の社会的経済的価値（存在意義）が19世紀になって大きく変質
し、単なる愛玩物としてではなく、大衆的な情報メディアとしての機能を獲得してきたことに拠るも
ので、一浮世絵師の技倆の問題として還元して理解することなど出来ないからである。

思い返せば、従来の浮世絵史は絵師（流派）を焦点化して綴られてきた。それは、あたかも文学史
に於いて作者を焦点化し、その想像力の所産として〈作品〉の価値を位置付けて来たのと軌を一にす
る発想だと思われる。つまり、商品としてのテキスト（錦絵）が生産され、商品価値を持っているが
故に流通可能になったという商業資本主義システムの成熟を無視して、テキスト（錦絵）を単に一芸
術家としての作者（浮世絵師）の芸術的達成（作品）として還元してしまうという視野の狭い発想法で
あった。

ここで^{テキスト}文字列と^{イメージ}絵画との芸術的な優劣など論じても無意味であるが、絵画の持つ圧倒的な情報量の
多さについては確認しておく必要があるだろう。と同時にテキストにおける典拠と同様に、絵画に於
いても画題という様式に基づく典拠については考慮しておくべきである。つまり、テキストでも絵画
でも込められた情報を解読するためには、それなりの教養が要求されているのである。

ところが、絵巻物として流通した古典の例を挙げるまでもなく、我国では古くから画と文とが一
体化した絵入メディアが主流であった。17世紀初頭に半世紀ほどの古活字本時代を経ながらも定着
せず、その後、長く製版本の時代が続いたのも、画文が一体化した絵入本の伝統を強固にしたに違
ない。この傾向は、絵入本というメディアから絵画だけが独立した摺物として発生し、大小曆など実
用品を装った「芸術」として私的に作られるようになった。当初は、非売品としての私的な愛玩品で
あったがゆえに、採算性を無視した多色摺の技法が獲得できたことは多くの浮世絵史で説かれてい
るところである。

さて、浮世絵という摺物（一枚摺）が「江戸の華」と呼ばれる美しい多色摺の錦絵として商品価値を持ったのは18世紀末であり、役者絵や美人画と呼ばれるジャンルが発生し、ビジュアルな商品として人気を競うようになった。19世紀に入ると武者絵や風景画などが流行、幕末開化期には新たな風俗や景観を描いたものが人気を得る。このように、市井の風俗や流行に敏感に反応して錦絵に描かれる主題が決められるようになる。さらに、明治期に入ると視覚的な報道性を持つ戦争画などが増え、次第に（錦絵）新聞へと変質していく。

この流れは、総て商品としての価値を高める方向で進んだ。換言すれば需要に即した商品価値を高める変化ともいえる。となれば、其処に文字列による情報（広告）を添加すれば、より商品価値が上がる考えたのも不自然ではない。つまり、絵が主体であった浮世絵は、多色摺の錦絵に成り商品価値が増大するに従って、画文が一体化したメディアへと変貌を遂げたのである。最終的には報道メディアである錦絵新聞に至るのであるが、絵入の情報告知媒体として明治期まで浮世絵というメディアは生き続けたともいえよう。

具体的に顕著に啓蒙性を見て取れるのは疱瘡絵などであるが、有名な「厄病除鬼面蟹寫真」（森光親寫、金屯道人識）という錦絵がある。これには「皇朝西海中に湧出る鬼面蟹ハ古代管領高國の臣畠村彈正高則撰州大物浦の合戦敗逆浪に身を投じ其靈化して蟹となる土俗称で鳥村蟹といふ此説おそらくハ附會ならんか鑑に水五の氣によりて生る物なり其甲をもて門戸に釣せばよく諸の厄を除き疫癘をはらふこと實に神靈あるかごとし然れども東海にハ得ことかたし依て其本形を寫真とりて一紙におさめ衆人に見せしむ常に門戸室壁に張置て四時の禍を決べきなり 金屯道人謹識」という安政期に鈍亭魯文が使用していた「金屯道人」の填詞が入っている。この例などは、「厄除け札」としての実用性を売り物にしたものであろう。

大半の資料は既に散佚してしまったものと推測される報条（引札）であるが、以前から継続してきた仮名垣魯文の手による報条の調査に抛り、少なからず好事家等の手によって蒐集されたものが貼込帳として遺されていることが分かった。国立国会図書館蔵の「広告研究資料」「明治時代広告研究資料」や一橋大学附属図書館蔵「奎星帖」など大部なものから、国文学研究資料館蔵「東京横浜明治初期料理店及び商店引札」や個人蔵のスクラップブック、また毎日新聞社新屋文庫、アドミュージアム東京などのコレクションでも蒐集されている。

これら報条には製版のみならず活版を含めて様々なタイプがあるが、広告文を書いた戯作者や版下を清書した書家などは記されていることが多い。中には錦絵も散見され、「女中御母公人口入所\すゝめや」（鈍亭魯文戯誌、玄湖書、一勇齋國芳画、古賀屋板、午九〔安政五年九月改〕、東洋文庫蔵）は大判二枚続に店の内部にいる女主人と客の女たちを描き、それぞれの発言を小さな平仮名で周囲にぎっしりと書き込む。魯文は「贅日 貨悖て入時ハ。悖て出る湖上の融通。出替時の口入所に。三個寄バ茲き。婦人の口のさま\に。十個よれバ十種の註文。鹿戀が目見の相夫戀。愛妾られて下さりませと。お障り文句の傍仕。お手が鳴るなら銚子と悟る。禪體利發の酒肴樓女も。花ハくれないの客を譏り。醜女が嫁の言込ハ。持参を低き鼻にかけ。小判で面をはるからに。いとゞいびつに見るぞかし。されバ玄燕ハ帰鴈と行違ひ立鳥跡を濁らせバ。また入替りて清すあり。首尾をつくらふ上手の口入。女子賢ふして賣損はず。針縫待婢乳母人。東西南北と配當。胸勘定の算盤にはぢくもあれバ置もあり。三界無庵唯一心。どふでも女子ハ損じやエ、\鈍亭魯文戯誌〔印〕\玄湖書」と記す。これらなども画文一体の広告メディアと見做すことが出来る。

以上見てきたのは調査結果のほんの一部である。しかし、19世紀における浮世絵が、その商業メディアとしての商品価値が高まるに連れて、より長い填詞入りの浮世絵が大量に出されたことを明らかにできたものと思われる。詳細な調査結果は別途公開する予定であるが、従来、等閑に付されてきた戯作者が担った浮世絵の填詞についての調査研究の意義に関して、その先鞭を付けられたものと愚考する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 高木 元	4. 巻 11
2. 論文標題 明治期翻刻本の出版	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 読本研究新集	6. 最初と最後の頁 119-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 51
2. 論文標題 魯文の報祭（四）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 97-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 52
2. 論文標題 『貞操婦女八賢誌』 - 解題と翻刻 - （四）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 -文系-	6. 最初と最後の頁 27-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 50
2. 論文標題 『貞操婦女八賢誌』 解題と翻刻 （三）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 -文系-	6. 最初と最後の頁 83-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 50
2. 論文標題 魯文の報条(三)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 49
2. 論文標題 魯文の報条(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大妻国文	6. 最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 50
2. 論文標題 『貞操婦女八賢誌』- 解題と翻刻 - (二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大妻女子大学紀要 - 文系 -	6. 最初と最後の頁 59-92
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木 元	4. 巻 25
2. 論文標題 『英名八犬士』攷	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東海近世	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高木 元
2. 発表標題 江戸読本 - ギメ東洋美術館図書室所蔵 日本19世紀伝奇小説をめぐって -
3. 学会等名 ワークショップ「和古書の世界」（フランス国立 ギメ東洋美術館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

大妻女子大学学術機関リポジトリ https://otsuma.repo.nii.ac.jp/ ふみくら(セルフアーカイブサイト) https://fumikura.net
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------